

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 寺尾美保

本論文は、西日本の有力な外様大名であった薩摩藩島津家が、明治維新による廃藩置県後に、華族としてどのように家を存続させ経営したかを、主に財政面から解明し、その実態を明らかにすることで、いわゆる「皇室の藩屏」として一概に語られがちな従来の華族研究に再考を迫るものである。学芸員として研究員として尚古集成館（1923年に島津家が創設）に在籍した筆者は、永年にわたって島津家伝来史料の整理と解読に取り組んできた。その中には未紹介の文書・史料が数多く含まれ、日本史学のみならず、文化資料の発見と活用を標榜する文化資源学にとっても有意義な論文となっている。

主要な論点は二つある。第一に、廃藩後も家を存続させるために、旧領地および県との関係をどのように築き、何を経済の基盤としたか。銀行と鉱山経営に注目する。第二に、大名に代わって華族という新たな社会的地位を与えられた島津家が、それをどのように受け止め、何を自らの役割ととらえ、どのようなアイデンティティを形成したか。家史編纂に注目する。

本論文はつぎの三部から成る。第一部「草創期の華族」では華族制度を概観するとともに、それが決して一枚岩ではなかったことを明らかにする。島津家は華族を束ねる華族会館への加盟を最後までためらった。それ以前から、元家臣らを中枢に置く明治政府と島津家とは微妙な関係にあった。東京への移住命令にも容易に応じなかった。状況を変えたのが西南戦争であり、結果的に政府に与することとなり、これを機に華族の自覚を高めたとする。第二部「大名華族としての島津家の家政改革」では、新設の鹿児島県との間で未分離だった資産を島津家が確保する過程を追求した。鉱山経営が中心事業となる。そして、これに応じた家政改革を断行し、財政を安定化させた。会計史料などから資金の流れを丹念に追うことで説得力を高めている。第三部「大名の歴史をめぐる家史編纂と国史編纂」では、大名家としての歴史と華族としての歴史がどう接続されたかを検証し、政府主導の維新史とは異なる位置づけを試みている。以上の極めて実証的な研究により、明治前中期の島津家の実態が明かされたことは評価に値する。

本論文はおよそ30年にわたる研究成果であり、島津家史料に終始取り組んだとはいえ、この間の関心の移行が論の統一を弱めている点は否めない。何よりも、タイトルにいう「大名華族の誕生」が他家を含めて何を意味したのかについて議論が十分に尽くされていないが、もたらされた成果の大きさと比較すれば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会では本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定する。